
モンスターハンター【鼓動激動恋愛模様！？】

？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター【鼓動激動恋愛模様！？】

【Nコード】

N4458I

【作者名】

？

【あらすじ】

「自分の両腕に抱えられる人達だけでいい。守る意思と決意を持て。その人達もまた、自分の両腕に抱えられる人達を守ってくれるだろう。そうすればきっと皆で手を取り合って生きていける。」そんな父の言葉を胸に、苦悩の過去を背に、少年、レインはハンターの道を歩み出した。

第一話〈父さんの背中〉

イスマニア大陸中部、訓練所用狩場、大闘技場。

今ここにハンターを目指す男女が集まっている。

下は十歳から上は二十代まで、皆何かしらの理由、目的、信念のいずれかを持っている。

そして彼ら彼女らは今、自分達が学び得た知識、技能を持ってハンターの旅立ちの門である初心者講習終了試験を受けていた。

「これで：終わりだあ！」

ザシュッ！ と、心地よい音と同時に、ギャオアアア：と、断末魔の叫びが響いた。

ドサツと音を立てて倒れたのは青色に点々黒い部分がある鱗を身体に纏い、鳥の用に尖ったクチバシの用な口が特徴的なランポスと呼ばれる鳥竜種に属する小型の肉食モンスターだ。

この大陸では最もポピュラーな肉食モンスターでハンターが最も最初に対峙する人に害をなすモンスターだ。

個々の能力は大したことが無いため一対一なら苦戦することはまずない。

だが、それ故にランポスは集団行動する事により自然界を生き抜いて来ている。

勿論、チームワークはモンスターの中でも一、二を争う程良い。

大群に囲まれれば熟練のハンターでも手傷は免れない。

駆け出しハンターで命を落とす者の多くがランポスの集団によるモノだと言われているくらい集団だと危険なモンスターなのだ。

そして初心者講習第一次試験の内容はそのランポス三匹の同時討

伐だ。

「うむ、レイン ラドクリフ。第一次試験の合格を言い渡す。おめでとう。」

はあはあ、と肩で息をするレインの背後にいつの間にか立っていたクロオビシリーズと呼ばれる教官専用防具を装備したガンツ教官が笑顔で言う。

ふう。と息を整えた後、ありがとうございます！ と満面の笑みで言った。

少し長めの炎のように赤い髪に同じ色のクリツとした目、くつきりとした二重瞼や薄い唇など、髪がもう少し長ければ誰もこのコを男とは思わんだろうな……とガンツは心の中で苦笑いした。

「君の実力ならば詰まる事なく一発で卒業出来るだろう。が、一つ言わせてもらおう。」

今までの温厚な笑顔が消え何時も教習生達に向ける厳しい顔になった。

「何ですか？」 だがレインは気にする事もなく笑顔で対応する。彼、ガンツは何時もそうなのだ。他の教習生は怖いと言うがガンツはとても熱心に色々と教えてくれた。

それこそ一から十までだ。

教えてくれている間は勿論、教官と教習生だから笑顔を見せることなんてなかったけど訓練所の寮や食堂何かで雑談するときはいつでも笑顔で多分最もお世話になった教官だと思っている。

「うむ、私はな、君の父であるライド ラドクリフさんに大変お世話になった。君はよく私の教え方を誉めてくれたね。実は私はライドさんの教え方を真似ているだけなんだよ。」

驚きで目を丸くして立ち尽くすレインの頭に手を置き、ガンツは何時も見せる厳しい顔から優しい笑顔に変わった。

「君の闘い方を見ているとな、ライドさんに似ている。まあまだ似て非なるモノ。まだまだ未熟な部分が目立つが、いつか君は私を遥かに越えて行くだろう。そしてライドさんと並ぶ、いや、きっと

ライドさんすら遙かに越えていくだろうな。」

…父を、越える：

それはレインの夢であり目標だった。

幼い頃から何処かで人の為に、自分や母の為に命を懸けて闘い続ける父を誇りに思っていた。

それ故にガンツの言葉はレインにとってどんな言葉より嬉しかった。

だが、父の背中はずっと大きい。

この初心者講習は六年のカリキュラムで構成されていて今から六年前、十二歳の時に入所手続きをした時の事だった。

ラドクリフの名を聞いて誰もが、まさか：ライド ラドクリフさんの親族の方ですか？ と訪ねて来た。

それこそ受付をしていた若い女性から歳でハンターを引退し裏方である教官に転任した老人まで、中には同じ教習生まで知っているまさに老若男女誰もが知る有名人だった。

父がハンターとしてとても優秀だった事が嫌でもわかる。

そんな父を越えるなんて：

「越えるなんて無理だって顔してるな。まっ相手は何てったってスサノオの一人、聖剣のライドだもんな。」

「えっ！？ 父はスサノオの一人だったんですか！？」

スサノオとはハンターをまとめているギルドと呼ばれる組織の本部、ギルド本部にいる大長老の脇差しの名前が由来で大陸全ハンターの中から最も優秀な成績を納めている四名のハンターを指す。

正に最強のハンターにのみ与えられる称号だ。

そして闘い方により様々な名を与えられる。

例えば正統な真っ向勝負で闘う者には男なら【ナイト】、女なら【ヴァルキリア】の名が与えられ、例えば父の場合ならライド ナイトと言う名前になる。

他にも堅実な守りの闘いなら伝説の聖盾の名である【イージス】。爆弾を使った闘い方が特徴的なら爆弾の意味を持つ【ボム】など。

父さんが有名で優秀なハンターなのはわかっていたけど…まさかスサノオの一人なんて…

「何だ？ 知らなかったのか？」

「はい…父さんが優秀なハンターだって言うのは気付いていましたけど…まさかスサノオだったなんて…」

嬉しさ半分、驚き半分でレインの表情はとてつもなく複雑になっていた。

「まあライドさんはスサノオだったがそれでも俺はお前はライドさんを越えていく逸材だと思っている。だがな…気になる事、と言うか警告が一つだけある。」

「何ですか？」

「ライドさんもそうだったんだが…一人ならそんなこともないんだがチームプレー時に仲間を守るためとは言え自己犠牲な行動が目立つぞ？ 仲間を守る意思と決意は良いことだが自分が怪我をしてしまつては元も子もないぞ。きっとライドさんの遺した言葉を守っているんだろうが、その言葉にもあっただろう？ 自分の両手に抱えられる人でいい、と。」

幼い頃に父さんが寄越してくれた最初で最後の手紙。始めは謝つてばかりだった。

父らしい事をしてやれなくてすまない、一緒にいてやれなくてすまない、寂しい想いばかりさせてすまないって。

寂しくなかったって言ったら嘘になる。でも、それ以上に人を守っている父さんを誇りに想っていた。

だから、寂しいなんてそれほど思わなかった。それ以上に父さんと一緒に闘いたかった。

もうそれは叶わないけど…僕は父さんを超える目標と父さんに換わって人を守る決意を手に入れた。

そして手紙の最後にこう綴られていた。

母さんからお前がこんな俺を尊敬してハンターを目指していると聞いた。

母さんは不安がっていたけどな、俺はそれを誇りに思っている。誰かが守らなくちゃいけない。

でも死ぬことだってある。

命を懸けて守り抜く決意が必要な仕事だ。

誰かに任せればいい危険な仕事を誰か、ではなく自分が守ってみせると思ってくれる息子は自慢以外の何物でもない。

だからお前に俺の意思と決意、そして心構えを教える。

こう想って闘うハンターが増えればいいと思う大切な心構えだ。

自分の両腕に抱えられる人達だけでいい。守る意思と決意を持て。その人達もまた、自分の両腕に抱えられる人達を守ってくれるだろう。そうすればきつと皆で手を取り合って生きていける。

「ふっやっぱりライドさんはでかいな。」

突然のガンツの声に昔を思い出して考え込んでいたレインが顔を上げた。

そこにはしっかりとレインを見ながら同じ様に思い出に浸っていたガンツがいた。

「まあお前もすぐ聞くことになるだろうが俺はいつも卒業生に言っていることがある。」

そう言うガンツは今まで見たこともないような心からの笑顔を見せた。

「お前の父、ライドさんの守る意思と決意の事だ。俺はライド

ラドクリフと言う人物に会えたこと、ライド ラドクリフと言う師を得たことを誇りに想い神に感謝している。」

その途端、涙が出そうになった。

父さんの事はよくは知らない。

でも…父さんはやっぱりでかくて…全てが凄かった。

「む、いかんいかん。どうもお前と話していると歯止めが効かんなあ。そろそろ二次会場に行きなさい。お前からすれば残る筆記試験も、調理試験も、調合試験も、余裕でパスするだろうがな。」

コク、と頷いたレインはガンツの横を通り過ぎ、大闘技場から受

付の方へと抜ける出口に向かって歩き出した。

モンスターが出れないように作られた長い梯子を登りきった所に小さな踊り場があり、目の前に扉がある。

これを抜ければ受付に出るのだがレインそこで回れ右をした。

高さと距離から小さく見えるガンツは話していた状態、つまり後ろ向きで空を眺めて想い出にフケているようだった。

スウーッと息を吸い込んだレインは腹の底から大声で

「ガンツ教官っ！ 最後までありがとうございましたっ！ 父さんの次に尊敬していますっ！」

と笑顔で叫んだ。

すると振り返ったガンツが苦笑しながら

「そりゃー争う相手が悪いわぁっ！」

と返し、笑顔で手を振ってくれた。

レインも笑顔で手を振ると一度大きく深呼吸すると大闘技場を跡にするのだった。

第一話〈父さんの背中〉（後書き）

名前 レイン ラドクリフ

称号 訓練生

性別 男

年齢 18

使用武器 片手剣

ハンター歴 0年

自己紹介 この物語の主人公。今は無き父の背中を追うハンターを目指している。父、ライドは最も優秀なハンター4名に贈られる称号、スサノオを所持していた。

名前 ガンツ トーラス

称号 熟練教官

性別 男

年齢 30

使用武器 片手剣

防具 クロオビシリーズ

ハンター歴 10年

自己紹介 20歳の時、レインの父、ライドに弟子入りしハンターになった。それから5年程、ライドの元で修行に励んでいたがライドのように誰かを育て上げたいと思うようになり25歳の誕生日に教官に転職した。

名前 ライド ラドクリフ

称号 剣聖のライド

性別 男

年齢 同時35歳

使用武器 太刀

防具 ?

ハンター歴 20年

自己紹介 若干15歳でハンターになり、20歳の時にG級と呼ばれる歴戦のモンスターと闘うハンターにまでなった天才。今から8年前、モンスターとの交戦時に殉職した。

第二話　く別れと旅立ちく

初心者講習の第二次試験は、採取学、生態学、調合学、治療学、調理学の五つから構成される筆記試験だ。

ハンターとして必要な生き残る為の知識を問われる。

採取学は様々な地域で取れる基本的なモノ、例えば、かすり傷や打撲などの際に擦り潰して使う薬草や。

大型モンスターなどの位置を把握するために使うペイントボールや、様々な玉を作るのに必要な素材玉と呼ばれる玉によく使うネンチャク草などが、どの様な場所で採取出来るか。などを問われる。

他にも鉱石類や虫類など、採取学はハンターにとって最も必要な知識と言えるだろう。

生態学は様々なモンスターの生態を問われる。

アプトノスと呼ばれる四足歩行の労働力や食用として重宝されている草食モンスターから、空の王と称されるリオレウスなどまで、ハンターとして生き残る為にとっても必要な知識と言える。

調合学はその名の通り、調合に関する問題だ。

例えば、回復薬の調合方法は？ と問われたら答えは薬草とアオキノコを擦り潰しながら混ぜ、それに水を加えて再度よくかき混ぜたらキメの細かい布を使い液体だけ容器に濾す（こす）となる。

またその逆を問われる事もある。

例えば、回復薬にハチミツを加え良く混ぜたら一体何になる？ などだ。

この場合答えは、回復薬グレート、になる。

つまり調合学とはハンターにとって闘いを有利に進める為に必要不可欠な知識なのだ。

治療学はハンターにとっても私生活を送る庶民にとっても繋がりの深いモノになる。

ただそこには大きな違いもある。

軽い打撲や擦り傷の場合私生活の面では全くと言っていいほど問題ない。

だが、ハンターにとってはそんな軽い打撲や擦り傷でも命の危機に直結する事もある。

それ故に痛みを抑え、化膿を防ぐ術を知っておく必要と動きを邪魔しない包帯の巻き方などを熟知しておく必要がある。

命を守り時には仲間を守るために最も必要な知識だと言える。

最後に調理学、腹が減っては戦は出来ぬ。の言葉通り、腹が減っているのは俊敏な動きは出来ない。

だがそれと同時に狩場でそれほど手の込んだ料理を、というのも無理な話だ。

狩場では栄養云々よりも腹持ちがよく日持ちする携帯食料やこんがり肉と言った、栄養が傾いた食事になる。

それ故にこの調理学とは狩場以外で簡単に作れる野菜中心の調理技術を学ぶ問題になっている。

とは言えここ最近では狩場などから、出稼ぎに来ている猫に似た獣人族に属するアイルをネコバアと言う仲介役を通して契約し、コックや時には狩場での相棒として飼うことがあり、調理学はもういらぬのでは？ などの声も出ている。

だが、ネコバアと契約するためにはハンターとしてのそれなりの信用度が必要不可欠であり、調理学は駆け出しハンターにはどうしても必要な知識になる。

よし、出来た。

コトツと木製の机の上にペンを置いてレインは回答用紙を見直していく。

分からない問題は百問中数問しか無かったが念には念を、と言うやつだ。

一通り問題と答えを見直したらそれを机の上に戻して、ふう、と

一つ溜め息を吐いた。

試験中なので周りは見れないがこの第二次試験に使われている訓練所の教室にも数多くの思い出がある。

自分が卒業試験で唯一不安に思っていた一次試験をパス出来た以上、この第二次の筆記試験と第三、第四の調査実習と調理実習はまず問題ない。

不測の事態が起こる何てのはまずないからだ。

まあ彼が実技演習以外の成績は訓練所で一、二を争う程出来がいいということもあるのだが。

この教室も今日で見納めになるのか：六年前に初めてこの机に座った時はとても大きく感じた時代を感じる古い木机を撫でた。

この六年間、本当に色々なことがあった。

試験はまだ残っているが一次試験の順番を待っていた時に比べるに心はかなり余裕があった。

仲間達はこれから一体どうするのだろうか。

自分は故郷であるロール村に帰り狩りを行うか、それともこの大陸の首都であるこのマチティアに残り誰かと狩りをしようか悩んでいた。

村には一応専属のハンター、ロズさんがいる。

自分がいなくても今まで通り何の問題もないだろう。

故郷が恋しくない訳ではないがやはり同じくらいの強さの仲間がいる方がライバル視しやすく、成長が早い気がする。

全部の試験が終わったら第一学年からずっと一緒に二人部屋で暮らしていた仲間、ジェイにこれからも一緒に狩りをしないか？と聞いてみようか。

彼が故郷に帰るなり、他に組む相手がいたりしたらロール村に帰ろう。

そう決意を固めたと同時にちょうど第二次試験終了の角笛がなり響いた。

「うむ、皆、まずは卒業おめでとう。今この時より君達は訓練生や教習生ではなく駆け出しとは言えハンターになる。最初は簡単なクエストしか出来ないだろう。とは言え、たかだかアプトノスの生肉を集めるだけのクエストでも、君達はハンターとして最も大事な使命をしっかりとこなしている。その最も大事な使命とは誰かを守る事だ。君達が難なく集めた生肉でも、生肉を必要としている人が君達に頼まず自分でアプトノスの生肉を取りに行ったら、もしかするとアプトノスの反撃を受け死んでしまうかもしれない。死なないかもしれないが死ぬ可能性はゼロではない。もしかしたらアプトノスを狙ったランポス何てのもいるかもしれないからな。つまり言いたい事はだ。こんな簡単な事で誰かを守れているのだろうか、と不安がる必要はない。と言うことだ。どんな簡単な事でも誰の役にも立たない事や誰も守ってない何て事はない。だから胸を張っていい。そして最後になるが、君達に頼み事がある。どんなときでも自分の両手で守れる人達だけでいい、守る意思と決意を持って欲しい。一つ注意しておくがこれは自己犠牲とは全く別だ。怪我をしない程度でいい、守って欲しい。長くなってしまったな。最後にもう一度、皆卒業おめでとう！」

わああああ！！！！　と歓喜の声が響き渡り今年新たに百十三名の訓練生がハンターになった。

歓喜の声が冷めやらぬ訓練所、大会場でレインは迷子の子供のようになさ迷っていた。

「ん？　どした、レイン。迷子か？」

灯台もと暗し、とは上手く言ったものだ。

真後ろにいたよコイツ：

「いや、ちょっと、ね」

口が避けても言えません。このドSに君を探していたなんて。

「ふうん、そういやさ、レインはこの後どうすんの？」

「故郷かマチティアか迷ってる。ジェイは？」

ナイス話題、何て思ってますんよ？

「そっかあ：俺は故郷に帰るつもりだぜ。っと、もう行かねえと船が出ちまう。じゃなっあばよ。」

と、短く揃えた茶色の髪揺らしながら、卒業記念に贈られた得意な武器の初歩的武器、彼は大剣使いなのでバスターブレードと言う鉄系に属する武器を背負って返事も待たずに走り出した。

「まあ、とにかくこれで決まりだね。」

レインはそう呟くと腰に装備したハンターナイフと呼ばれる鉄系に属する初歩的な片手剣の柄が騒ぎ続けている仲間達に当たらないように大会場を後にした。

長い廊下と数多くの教室、訓練所のすぐ隣にある寮を窓越しに見ながら一歩一歩、噛み締めるように歩き続ける。

ありふれた言葉かもしれない、だが僕にとってこの六年間は本当に宝物だ。

長い廊下の終わりには開け広げられたドアとその先にはポポの角で造られた巨大な門があり、門の上には木の板に訓練所と書かれている。

外に出ると同時に春独特の草木の薫りがして、レインは一度それを大きく吸い込み吐き出した。

そして門まで歩き進めて回れ右をすると六年間自分を育ててくれた訓練所に大きく一礼をした。

ありがとうございます。

心の中にはその一言しかない。

「ふっお前は本当にライドさんによく似ているな。」

パツと振り替えると門にもたれるようにして立っているガンツがいた。

「見えるところにもよかったんだがな、君ならきっとそうするだろうと思って試したくなった。」

そう言うガンツの表情は何処までも笑顔だ。

「君に伝えなければならぬ事と渡さなくてはならないモノがあるってね。付いてきなさい。」

そう言うガンツは訓練所とは逆、つまりマチティアの中心部に向かって歩き出した。

マチティアの中心部を横切り住宅地に入り、ガンツの後ろを歩き続けること約十分、一軒の家の前でようやくガンツは足を止めた。

まっ言わなくとも解るだろうが俺の家だ。さっ入れ、とガンツに促されるがままレインは足を踏み入れた。

綺麗、と言うよりはどちらかと言うとあまり使われていない感じがする家。それが率直な意見だ。

寮には教官室と呼ばれる教官達専用の個室があるため、あまり使うことがないのだろう。

よし。ついて来い、と再び歩き出すガンツの後をまた付いていく。木で出来た机と向かい合うように置かれたイス、それに布が被せられた何か、しかない部屋に通され促されるがままイスに座った。

「よし、まずは話の方からしようか、実はついさっきロール村の村長さんからお前宛に手紙が届いてな。どうやら村の唯一のハンターが私生活には問題ない程度らしいが大怪我をしてしまったらしくてな。ハンターを引退しなくてはならないらしい。そこでお前に出来れば戻ってきて欲しいとのことだ。」

と、正面に座ったガンツは開口一番驚愕の爆弾発言をかました。

「えっ!? ロッズさんが!？」

「不意に現れたイヤンクックの突撃を避けきれずに右足が巻き込まれたらしい。幸い命に別状はないし足も歩く分には問題ないらしい。だが走れん以上ハンターとしては致命的だからな。イヤンクックはその後付近の村のハンターに頼んで討伐済みらしい。」

「…でも急いで戻らないと!」

自分に出来る事なんてたかが知れている。

でも、自分の故郷を何としてでも守りたい。

父さんの教え通り守り抜きたい。

「待て待て、落ち着け。もうロール村に向かう船は手配してやっている。だがどうしても、もう少し時間が掛かるらしいんだ。」

そう、ですか…と冷静さ失い熱くなっていたレインは徐々に冷静さを取り戻していった。

「あの、船の手配ありがとうございます。」

いや、いいさ。と微笑むガンツは立ち上がると部屋の隅に置かれた布が被せられた何かを持ってきた。

「もう一つの用事ってえのがコイツだ。」

と言って布を叩くとニヤツとイタズラっぽく笑った。

「何ですか？ それ。入ったときから気にはなっていましたけど…」

するとガンツは何か言おうとして急に止めるとまたニヤツとイタズラっぽい笑みを浮かべた。

「これはお前のモノ、だからな。自分で見て確かめな。」

何やらニヤニヤと意味深げにニヤつくガンツに少し不安を感じながらも布の端を掴むと一気にそれを捲り上げた。

「…これは…確か、ハンターシリーズ？」

そこにはハンターシリーズと呼ばれる鉄鉱石やケルビと呼ばれる臆病な性格の鹿に良く似た草食モンスターの皮。

ブルファンゴと呼ばれる、気が荒く、ハンターを見つけると突進してくる大型の猪の皮を使った防具があった。

ハンターシリーズは駆け出しのハンターにとっても人気で数多くの駆け出しハンターが装備する代表的な防具の一つだ。

ハンターシリーズやバトルシリーズと呼ばれるハンターシリーズの強化バージョンは実はマチティアの様な巨大な街なら買うことが出来る。

だが、自分はこんなモノ発注した覚えはなかった。

だいたい、防具を購入する場合、素材費、製作費、調整費に利益と色々な金が上乗せされるため鍛冶屋などで防具を作って貰うのの二倍お金が必要となる。

訓練所の入学金すらリアナさんに出して貰ったと言うのに自分にこんな高価なモノを買える訳がない。

「あの：何かの間違いじゃないですか？ ハンターシリーズを発売した覚えはないんですけど…」

何故か申し訳なさそうな顔でそう言うレインの頭に手を置いたガントは、ただ笑顔で、良く見てみる。お前ならきつとわかる筈だ。と言う。

一体何がわかると言うのか、そもそもこのハンターシリーズは：ふ、とそのハンターシリーズに違和感を感じた。

綺麗だから新品だ。とばかり思っていたがよくよく見るとわかりにくい細かい傷が入っていた。

しかしこれが中古だから何だと言うのだろうか。考えられる事の一つ、ガントが昔使っていたハンターシリーズで自分に譲ってやる。と言うのが妥当だろう。

だがそれだけではない気がした。

ガント教官、じゃなくてもうガントさんか。は、これはお前モノ、と言った。

それはつまり…まさか…！

「やっとな気付いたか。そう、それは確かに俺のお古だがそれと同時に俺の師、ライドさんのお古でもある。」

その証拠に、とハンターヘルムを手にとるとヘルムの内側、ちょうど後頭部の辺りにイニシャルが掘られていた。

一番下の名はR・Rでライド ラドクリフ。

その上がG・Tでガント トーラス。

そしてその上には既にR・R父さんと同じイニシャルの僕の名前が掘られていた。

「俺はライドさんからこの防具と一緒に色々な事を教わった。だ

から俺もお前に色々な事を教えたからこの防具もお前に託す。まっ
元々お前のモノ、なんだかな。」

そう言ってガンツはまたニヤツと笑みを浮かべた。

そしてガンツの家で少し早めの昼食を取りながら雑談すること二
時間、ロール村に向かう船の準備が整ったと知らされたレインは恩
師のガンツに見送られながらマチティアを後にするのだった。

第二話 く別れと旅立ちく（後書き）

名前 レイン ラドクリフ

称号 ルーキー

性別 男

年齢 18

使用武器 ハンターナイフ

ハンター歴 0年

自己紹介 この物語の主人公。遂に訓練生かられっきとしたハンターになった。そしてその祝いとして、ガンツからライドの想いとガンツ自身の想いが詰まったハンターシリーズを貰った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4458i/>

モンスターハンター【鼓動激動恋愛模様！？】

2010年10月12日08時02分発行